

生きる

釈尊

の出家と打坐 ①

藤田 一照

釈尊が誕生したばかりのとき、アシタという仙人が訪ねてきてその子の将来を予言した。「このみどり児は将来、世俗のうちにどどまるならば世界を統治する帝王となるか、あるいは出家して人類を救う仏陀になるか、どちらかである」と。

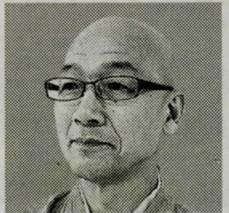
わたしは「帝王」を「所有」という次元の象徴、「仏陀」を「存在」という次元の象徴だと理解している。所有か、存在か。これは、釈尊だけではなく、われわれすべてに突きつけられた、生きる態度の選択肢である。

「所有」の次元では何かを自分の所有物として占有することが最優先事項になっている。そして、物や人、もっと抽象的なもの(知識や権力など)、それらを量的に豊かに所有すればするほど、幸福度が増すとされる。「わたしとはわたしを持っているもの」ことである「がこの次元における基本原則である」。

しかし、所有物を増すことへの没頭は必然的にその当人に不安、疎外感、孤独、空虚感をもたらす。失うことを恐れることなく、安心して所有することができるものなどこの無常の世には存在しないからである。また所有は所有者(主体)と所有物(客体)との間に溝を生み出すので、所

所有に重きを置けば置くほど所有者の「存在」は空虚で皮相的になっていかざるを得ない。

釈尊は人生の最初の段階をこの「所有」の次元で生きた。王である彼の父親は息子を世俗にとどめておこうとしてあらゆる努力を払った。感覚の喜びを惜しみなく与え、最高の教育を施し、結婚して子供をもうけることで王族の血統が絶えないように仕向け



ふじた・いっしょう 1954年、愛媛県生まれ。曹洞宗国際センター(米サンフランシスコ)所長。東大教育学部卒、東大大学院を中途退学、曹洞宗僧侶となる。米マサチューセッツ州の禅堂で約18年間住持として活動。著書に『現代坐禅講義』(佼成出版)『あたらしいわたし』(同、共著)など。近刊に『アップデートする仏教』(幻冬舎新書、共著)。

「所有」から「存在」の次元へ

「四門出遊」が契機に

たのである。「王」は世俗社会が所有志向の価値観をその構成メンバーに押しつけてくることの象徴になっていると理解できるだろう。

望むものがなんでも直ちに与えられる「所有」の理想郷のような宮殿での生活を享受していた釈尊であった。しかしあるとき、王城の東西南北の四つの門から郊外に出掛け、それぞれの門の「外」で、老人・病人・死者・修行者に出会うことで、そういう生き方に大きな疑問を持つようになる。釈尊が出家を決意する契機となった「四門出遊」と呼ばれる重要な出来事

「所有」の価値観は見事に破産してしまっただけで、老人、病人、死者は「所有」の次元の外に、それとは異質の「存在」の次元があることを示す具体的証しであり、修行者は所有ではなく存在に基づくまったく新しい生き方の実物見本である。

仏伝の表現によれば「心臓を毒矢で深く射られた獅子」のようになった釈尊にとつて、宮殿の生活はもはや何の喜びも充実感ももたらさない。存在という垂直の次元に目覚めた釈尊には、所有という水平的次元の象徴である宮殿はもう「牢獄」にしか見えないのである。この二つの次元の間の妥協がそれ以上受け入れられなくなったある夜、

かれは両親や妻子を含めた「宮殿」を去って、宗教的修行者の生活に身を投じた。

本来の意味の「出家」とはこのような、所有の次元から

存在の次元へのラジカルな転換のことである。それは、「豊かに持つために生きる」のではなく、「豊かに存在するために生きる」という人生の意味や目的の根本的なりセットなのである。そのときには、生活のまるごと全体が宗教的なものになる。

釈尊の宮殿生活を凌駕するような「豊かな社会」に生きているわれわれにも「四門出遊」は可能だろうか? これほどまでに老人・病人・死者・修行者が大衆の眼から巧妙に隠され、社会から軽視された時代があっただろうか?

真正の宗教的意識とは、所有という水平的次元の延長ではなく存在という垂直的次元への目覚めに関わるものであるとするなら、現代はまさに宗教にとつて危機の時代である。しかし、そのような所有の次元にまどろんでいるわれわれを激しく揺さぶったのが東日本大震災と原発の事故ではなかっただろうか。